

ました。顔なじみの人達がたくさんおりました。そして二日後、親戚の叔父さんが少しくらいの衣類ならあるから家へ行きましよう、尋ねて来て下さいました。

妹達を劇場に残し叔父さんの家へと急ぎました。駅前を通ったのですが、大勢の引揚者が汽車を待つておりました。叔父さんの家は町外れにあり、挨拶をして間もなく、ヒュウドカンと音がして慌てて外へ出て見ると、駅の周辺が爆破されたのか、真赤な炎が上っており妹達のことになり、走り出しておりました。少し走った所で、バラバラという銃声にこれは危ないと思い、近くの防空壕に飛び込んだ。

ふとん袋が一個置いてあった。その陰に隠れていたら、戸口からスワーと風がはいつてきて思わずハッとした。弱い爆風だったようだ。ここにいっても危ないと思ひ防空壕から出て見るとあたりは火の海、慌てて飛びだし叔父さんの家に戻り、夕方になって叔父さんと妹達を迎えに行きましたが、駅前には焼野原になっており、あの大勢の人達はどうしたのかと案じながら、妹達を連れ叔父さんのお家でお世話になることになり、夕食後皆さんが

集まっている小高い丘に登って見ると駅周辺はまたくすぶっていた。

ところどころがもえていて明るかった。その中何台ものトラックが何かを運んでいる。近くまで見に行ったらの話によると、駅前の引揚げ者達は、一瞬にして真っ黒な死体が折り重なり屍体の山で埋もれてしまったそうです。辛うじて助かった人も必死で逃げまどい、背負っていた子供や赤ちゃんをおろして見ると、火傷をしていたり首がなかったとか、それを聞いたとき何んと惨い事を、と無抵抗の引揚者に浴びせた容赦ない砲撃、あまりにも残酷だ。

戦争は、悲惨な生地獄です。

私の樺太居住のすべて

北海道 村上 善徳

明治四十年父母が開拓農民として富山県香城寺より南樺太泊居郡名寄村に入植し荒地を開拓し相当苦労したよ

うです。

名寄村は南樺太の地図を眺めて一番東西の狭い地点から約十二キロメートル南方に位置した農、漁、石炭の村で、泊居町と久春内村の中間にくらいた奥行き長い村であり、酪農を起こし泊居町王子製紙工場への森林伐採と海上輸送が主産の村であった。

明治四十年三月五日うぶ声を上げ小学校を卒業後母親の実家がある福井県鯖江市より旧制福井県立武生中学校を昭和五年卒業、父の病気のため帰郷、名寄村役場書記として五年間無事勤務したが、種々の事情により北海道庁に転勤し、母死去の訃報に接し再び帰郷し樺太庁に転属し現妻と結婚、恵須取市庁及珍内警察署に勤務を命ぜられ労働行政を担当して終戦となる。

終戦前食糧及び衣類その他残余があったので不自由を感じなかったが、ソ連の兵隊が来てからは民生局が出来、警察署勤務者は文官も警察官と同様軍人並みの取扱いをされ、嚴重に見張られ、一挙手一投足についてもうるさく監視され、毎日の作業についても精神的に参ってしまいました。

同僚なんか胃をこわし胃潰瘍になって可愛想な警察官もいた誠に気の毒でならぬ。

家内が泊居の実家に滞在する旅行証明書の印かんが一個足りないで行って恵須取町の民生局まで行かせられ、やっとのことで真岡町の仮収容所（真岡第二小学校）に二十二年五月初め頃辿り着いた。

同年五月二十八日に白竜丸で家内と子供二人の三人が内地に引き揚げ、自分は真岡町の本収容所（真岡高等女学校）に収容された。毎日荷役や鉄道の雑夫等の使役に狩り出され、小量の食糧で二、三か月の間に七十二キロあつた体重が五十七キロに痩せ衰えてしまいました。

収容所は大玄関を入ったすぐ隣の元の教室らしい蚕棚式となっており誠に汚い部屋だったが、まだ部屋さへ与えられなく廊下で寝起きしているたくさんの方がいる状態です。

入所してから始めて三百グラムの黒パンと小量の砂糖が配給あり大変助かりました。

その代わり交替で夜の立哨は二人一組で午後十一時より一時間から二時間しなければなりませんでした。

家族が出発してからやっと十一月十日いよいよ待ちに待った本国に帰国出来る日が来たのです。この時の気持ちにはなにごとにもたとえようがなく嬉し涙が出たくらいです。

貨物船改造の長運丸で十一月十三日函館に到着DDT粉剤で消毒され、一人七千円と引き揚げ証明書を買い函館上陸解散。

父親の親類の富山県香城寺の在所に行き、体の回復を待つて翌年二月、北海道札幌で検察事務官の試験を受け札幌区検に事務官として勤務中、心配していた家族の安否も福井県の家内の旧家に無事生活していることを確認したので安堵致しました。

折角区検に就職し家族全員集合して生活を始めようとしたが住宅難のため辞職し、叔父の世話で岩見沢幌内農協総務課長として採用され、職員住宅より子供達が元気な笑顔で通学する姿を見て涙がこぼれました。

農協も停年まで勤め、自家も建築し細々ながら年金生活で余生を送って居ります。

つくづく考えて見るに自分の人生は慌しい中戦争に敗

れ、着の身着のままの引き揚げ、人生の再出発、哀れな人生であったと思います。

終戦と引揚げの時のこと

北海道 河面 貞一

私の戦争体験は、他の人達の悲惨な体験から見れば、それはあまりにも小さい。しかし戦争前後の苦しみを味わった一人として、また異国の人も同じ苦しみをし、心から平和を願っていることを知り、ともかく戦争体験が風化しがちのいま、余命のある限り永遠の平和のため語り継ぐことが使命と考え、この機会にあえて拙文を残したい。

終戦当時、私は十九歳で樺太豊原市にいた。ソ連空軍による豊原駅空爆でちょうど苦難を乗り越え、やっとの思いで、たどりついた駅前広場には、樺太各地から大勢の人達が集結していた。

そこへ無残な爆弾投下、機銃掃射である。一瞬にして